

Title	<問い>をたてること
Author(s)	西村, 高宏
Citation	臨床哲学のメチエ. 15 p.6-p.8
Issue Date	2006-03-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10168">https://hdl.handle.net/11094/10168</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 〈問い〉をたてること

西村 高宏

今回の授業は、昨年度に洛星高校でおこなった授業を引き継ぐかたちで、「いわゆる〈哲学的な問い〉をたててみる練習をしよう!」、といったテーマでおこないました。

この〈哲学的な問い〉というものにかんしては、もちろん、ひとによってさまざまな考えがあると思います。とはいえ、その〈問い〉を、「そもそもそれは何なのか」などといったタイプの、いわゆる〈廻行的な問い〉としてとらえようとするのもまた許されるのではないのでしょうか。そして、かりにそのような〈問い〉をいわゆる〈哲学的な問い〉と呼び、またかりに、その投げかけた〈哲学的な問い〉のよし悪しを測る尺度というものがあると想定したばあいに、その尺度はおそらく、その〈問い〉が、いま問題としている対象においてほんとうに問題になっていること、あるいは問題にすべきことをあらためて浮き彫りにし、またわれわれにそれを気づかせてくれるようなタイプの〈問い〉になっているのか、といった基準にもとづくものであることが望ましいように感じます。そして、そのような〈問い〉を投げかけることこそが、ある意味「哲学」の魅力とも言えるのではないでしょ

うか。

そこで、生徒の皆さんに、この「哲学」と呼ばれているものの魅力の一端に触れてもらうために、そのような視点に立ったうえで、あらためて問題とする対象を眺め遣り、またそれにたいして、いわゆる〈哲学的な問い〉をたててみる作業をおこなってもらおうことにしました。



ただ今回は、「生命」の回の第一回目ということもあり、最初に、着床前診断（受精卵遺伝子診断）における受精卵の取り扱い、出生前診断における選択的中絶の是非、そして重度の障害新生児の治療停止（安楽死）などといった、出生の場面における「いのちの取り扱い」にかんする医療の現状ついて20分ほど情報提供をし、そのあとで、じっさい生徒のみなさんに、それにたいする〈問い〉をたててみる作業に取り組んでもらい、最後に自分の〈問い〉を発表してもらい、互いに意見を交わしてもらうという流れですすめていきました。

その際、授業中に生徒の皆さんがたてた  
〈問い〉は、以下のようなものです。

- ・(出生前診断では) ある価値観が生死を決めているが、その価値観をわれわれが決定してよいか。
- ・出世前診断の結果にともない、「選択的中絶」をおこなう権利はわれわれにあるのか。
- ・出世前診断のような技術が進むこと自体にそもそもどれほどの意味があるのか。逆に言えば、そもそも人を幸せにする技術とは何なのか。幸福の基準は何か。
- ・重度の障害をもって産まれてきた子どもの先の人生が不幸であるといっても、そもそも健常者がみんな幸せかどうかわからない(そもそも幸せとはなんなのか)。
- ・中絶を選択した両親の決定と、それに伴う責任をどう考えるべきか。
- ・受精卵、胎児、新生児などの「道徳的地位」をどう考えるべきか。彼らを殺すことは、本当に道徳的に許されないことなのか。
- ・ヒトはいつ人になるのかという形で、段階的に人であるかどうかを問うのはおかしいのではないか(生命は流動的なものではないのか)。
- ・胎児や新生児など、意志を持たないものについてどう接していくべきなのか。
- ・今後人になるという潜在性(可能性)をもつだけで、その受精卵を特別視するのはおかしいのではないか。あるいは逆に、われ

われにその潜在性をつむぎとる権利があるのか。

- ・障害をもった人が生きていくことで周りの人が苦勞するという事も考えなければいけないのではないか？

以上のように、おおよそ30分間、途切れることなく生徒の皆さんから発言がありました。何回か発言した生徒もいましたが、全体で大体10人弱の生徒さんが発言していたように思います(出席者は、約30名)。ただ、授業の進め方の反省点としては、以上のように生徒の皆さんが考え出した〈問い〉が、ほんとうに、さきに述べたような〈哲学的な問い〉になっているのか、すなわち、問題としている対象において本当に問われるべき問題点を浮き彫りにしてくれるような〈廻行的な問い〉になっているのかを、個々に十分検証していくための時間がほとんどなかった、ということが挙げられます。機会があれば、今回は、生徒の皆さんが、自分自身のたてた〈問い〉そのものをあらためて反省的に問い直していくという作業も視野に入れて、授業をおこなっていきたいと思います。

感想としては、今回は、「生命」というテーマがあらかじめ決められていたので、「出生」にかかわる題材を生徒の皆さんに提示し、そのうえで、それにかんする自分自身の〈問い〉を立ててもらおう、というかたちをとりましたが、むしろそういった決まった題

材を最初から与えるのではなく、生徒のみなさん自身で自分が関心のある題材を選び出してもらい、それに対する自身の〈問い〉を導き出してもらおうという方法のほうが、より意味のある授業になるように感じました。というのも、そのような試みを何度もおこなってこそ、そもそも自分自身が、はたして何に対してどのような関心があり、またそれをどのような切り口から問題にしようとしているのかをあらためて気づくようなことになるのではないかと思ったからです。つまりそれは、すこし大げさですが、最終的に自分が世界にたいしてどのようにかかわろうとしているの

かをあらためて気づかせてくれる格好の契機になるようにも感じました。〈哲学的な問い〉というものは、最終的にはこのようなしかたで、むしろ自分自身の関心につよくひきつけられてこそ、より優れた〈問い〉として仕上げられていくような気がします。

(にしむらたかひろ)

